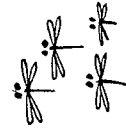


図書室月報

2020年(令和2年)10月5日

第689号

〈図書室のつどい 参加者の感想〉



『人類と病』に参加して

杉本 敬太郎



新型コロナウイルスのため、長らく休止していた歴史ある「図書室のつどい」。それがいよいよ復活した令和2年8月23日に開催された『人類と病』に参加した。

自粛明けの第一弾としてまさにうってつけなテーマ。ただ、その元となった著書『人類と病』は、今回のコロナ禍に便乗して急遽刊行したのではなく、講師の詫摩佳代氏の専門、国際政治の面から見た保健事業を題材として、2015年に企画されて少しずつ書き進めてきたものだという。そのため、目先の感染症対策を論じるものではなく、もっと広い視点、長いスパンで捕らえた、保健衛生に対する国際協力はどうあるべきかという内容だった。

まず、世界規模の保健機関であるWHO、そしてその前身の国際連盟内に常設された保健機関から続く、人類と感染症との闘いの歴史を紐解いた。それによれば、公衆衛生での世界的な協力体制はここ百年足らずでしかないこと。その協力体制を強化させる契機となったのは、悲しいことだが二度の世界大戦ということ。ただその短い歴史の中でも、天然痘やポリオを撲滅したり、近年で言えば、2003年のSARS、2009年の新型インフル、2014年のエボラ出血熱など、確実に成果を出している。現在も複数の感染症対策事業が進行しているという。それらを知れば、今回の新型コロナウイルスに対しても大いに期待したいところ。

そこで大きな壁となるのが、その協力体制を巡る各国の思惑と資金。ところがこれらは、今に始まったものではなく、発足当初からの問題であったという。ペスト・コレラ・黄熱病に対応するために、1851年に初めて国際衛生会議が行われたのにも関わらず、実際に国際機関を作るための合意ができたのは約50年後

の1903年であったり、この3種類の感染症での合意であったため、チフスなど新しい感染症が発生した時には対応できなかったりなど。

資金についても、今回の新型コロナウイルスのWHOの対応が中国寄りなのは分担金が増えてきたからだとか、その対応を理由にアメリカがWHOを脱退すると脅しをかけるなど、駆け引きが繰り返されている。だが今や、各国の分担金以外の自発的出資金という、純粋な寄付金の比率の方が格段に大きいという事実を知ると、一般的な報道とはまた違った面が見えてくる。アメリカ・中国そして日本といった各国の分担金を遙かに上回る自発的出資金を出している世界的な財団の本当の狙いは一体何なのだろうか、など。

人の往来が世界規模になった現在、自国だけが新型コロナウイルスを締め出したとしても終息は望めない。そこで、ワクチンを自前で開発・調達できない国へも平等に配布できるようにと、各国が資金を出資して自国で確保したワクチンを提供する「COVAXファシリテイ」という事業が立ち上がり、日本はこれに既に参加を表明しているということは、もっと知られて良いと感じた。ただし、被害の大きかったアメリカ・イタリヤ・フランス・ドイツ・中国といった大国が参加しておらず足並みが揃っていないという問題があるが。

今後、この新型コロナウイルスが落ち着いたとしても、世界規模の新しい感染症は出てくる。また、このウイルスに隠れて話題にも上らない感染症が、今現在も世界には多数存在している。そういった感染症と対峙していくために必要なものは、正しい情報。今回の参加者のように、高い関心と見識を持って活発な質疑応答を繰り返したことは、その一助となることを期待したい。

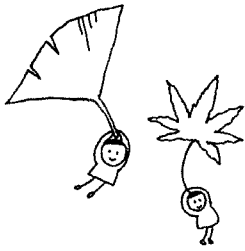
ブレイディみかこ著

『ワイルドサイドをほっつき歩け』

—ハマータウンのおっさんたち—

『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』

中井 一人



著者のブレイディみかこは、英国在住の日本人作家だ。英国人の夫と中学生の息子と暮らしている。2冊のノンフィクションは何気ないふだんの生活を描くのだが、世の中には「EU離脱(ブレグジット)」で国を二分する大騒ぎで、社会問題が続出する。『ワイルドサイドをほっつき歩け』は副題の「ハマータウンのおっさんたち」にあるように、社会学者、ポール・E・ウイリスが1977年の著書『ハマータウンの野郎ども』で扱った労働者階級の子供たちのような悪ガキが40数年経つとこんな風になるという「おっさん」たちの話だ。著者の夫(連合い)または「配偶者」は銀行に勤めたが今は「子供のころやりたかったから」という理由でトラックの運転手をしている。彼のまわりには自然といるいろいろな「おっさん」たちが集まってくる。

大型スーパーで働くステイヴは長身、スキンヘッド、冬でも半そでTシャツ姿の怪異なおっさんだが、高齢の母親の面倒を見ていて、在宅ケアの人が来ている間だけは、図書館に行って本を読むことを愉しみとしていた。ところが保守党政権の「緊縮財政」策のあおりで、この公立図書館は閉ざされ、コミュニティセンター内の乳児や幼児が使う遊戯室の隅っこに置かれたパソコン1台の「図書サービス」になってしまった。それでも意地で通い詰めるうちに、見るに見かねて係員を助けて幼児の世話を

し始めた。イースターに子供たちからファンシーなお礼のカード(「ありがとうお爺ちゃん!」)をもらって、はにかむ。かつて「ゆりかごから墓場まで」と言われた福祉国家・英国。従来の公共サービスの存続を望むおっさんたちは「EU離脱」投票の結果にも影響を与えたという。

『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』は息子と学校の話だ。息子は市内でランキング1位のカトリックの小学校からその中学に進学すると思いきや、かつて荒れていた地元の「元底辺中学校」を希望する。そこは「貧困」「差別」「ジエンダー」といった格差社会の縮図で、まさに「多様性」の学校だった。

「ブルー」という単語はどんな感情を意味するか」という学校の宿題に「『怒り』と答えたら先生に赤ペンで思いつき直された」と言う息子。ある日著者が息子の忘れていったノートを見るとその宿題のページの余白に「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」と書いてあるのを見つけた。著者は詮索しないが、子供の成長にちゃんと目を向ける。「多様性」には、すぐに得られる「正解」がない。それでも疑問を抱き、悩み、反駁(はんげ)しながらも、自分で考えようとする中学生の息子の姿が著者のやさしい眼差しで生き生きと描かれる。

2冊の本は同時期に書かれた「同じコインの両面」だと著者は言う。読むとおっさ

くにたちブッククラブ

—空間を超えて世界と向きあう文学—

柴崎友香

『わたしがいなかった街で』

(新潮文庫)

講師

小平麻衣子

(慶応義塾大学・日本近代文学)

とき 10月8日(木)夜7時半~9時半

定員 30名(今年度申込済の方は申込不要)

ところ 公民館 地下ホール

申込先 公民館 ☎(572)5141

西加奈子 『i』 (ポプラ文庫)

講師

紅野謙介

(日本大学・日本近代文学)

とき 10月22日(木)夜7時半~9時半

定員 30名(今年度申込済の方は申込不要)

ところ 公民館 地下ホール

申込先 公民館 ☎(572)5141

* 次回は11月12日(木)宇野千代『色ざんげ』(岩波文庫)です。



んと中学生たちがいつの間にか身近でいとおしい存在になってくる。コロナ禍で長期のロックダウンにあつてこの人たちはどうしているのだろうか。いや、きつとしたたかに生きているにちがいない。

新着図書から

〈総記〉	相対化する知性	西山圭太 (日本評論社)	007	閉ざされた扉をこじ開ける 稲葉剛 (朝日新聞出版)	361
〈哲学 心理学 宗教〉	定年を病にしない	高田明和 (ウエッジ)	159	障がい者だからって、稼がないと思うなよ。	361
	地図で見る世界の宗教	ティム・ダウリー (終風舎)	162	同僚は外国人。 細井聡 (CCCメディアハウス)	366
	時空を翔ける中将姫	日沖敦子 (平凡社)	184	女性がオフィスで輝くための12カ条	366
〈歴史〉	かくされてきた戦争孤児	金田茉莉 (講談社)	210	「勤労青年」の教養文化史 福岡良明 (岩波書店)	367
	昭和史の本質	保阪正康 (新潮社)	210	デンマークの女性が輝いているわけ	367
	スゴ母列伝	堀越英美 (大和書房)	281	目に見えない傷	367
	卒寿の自画像	中西進 (東京書籍)	289	レイチエル・ルイズ・スナイダー (みすず書房)	367
〈社会科学〉	ようこそ南アジア世界へ	石坂晋哉編 (昭和堂)	302	離婚の経済学	369
	地図で見る中東ハンドブック	ピエール・ブラン (原書房)	302	障害者と表現活動	369
	ワイルドサイドをほつつき歩け	ブレイディみかこ (筑摩書房)	302	地域で支える子どももの貧困 南野奈津子編 (ぎょうせい)	371
	まつろわぬ者たちの祭り 鶴飼哲 (インパクト出版会)	304	教育は何を評価してきたのか 本田由紀 (岩波書店)	371	
	ルポつながりの経済を創る 工藤律子 (岩波書店)	309	ものがたり茶と中国の思想 佐野典代 (平凡社)	383	
	3・11後の社会運動 樋口直人編著 (筑摩書房)	309	〈自然科学〉		
	しのび寄る国家の道徳化 碓井敏正 (本の泉社)	311	新種の発見 岡西政典 (中央公論新社)	481	
	デジタル・デモクラシーがやってくる!	谷口将紀 (中央公論新社)	311	どうする!? 新型コロナ	493
	強権に「いいね!」を押し若者たち 玉川透 (青灯社)	311	強制不妊と優生保護法	498	
	独裁者が変えた世界史 上・下	オリヴィエ・ゲズ編 (原書房)	313	〈文学〉	
	ユダヤ世界に魅せられて	広瀬佳司 (彩流社)	316	「井上ひさし」を読む 今村忠純 (集英社)	910
	平和をつくるを仕事にする 鬼丸昌也 (筑摩書房)	319	万葉学者、墓をしまい母を送る上野誠 (講談社)	910	
	中東テロリズムは終わらない	村瀬健介 (KADOKAWA)	319	故郷喪失の時代 小林敏明 (文藝春秋)	910
				人生論あなたは酢ダコが好きか嫌いか 佐藤愛子 (小学館)	910
				重森三玲 重森三玲 (平凡社)	911
				風と双眼鏡、膝掛け毛布 梨木香歩 (筑摩書房)	911
				クスノキの番人 東野圭吾 (実業之日本社)	911
				父・山口瞳自身 山口正介 (小学館)	911
				月のケーキ ジョーン・エイキン (東京創元社)	931

図書室のしらす

『南極ではたらく』

— かあちゃん、調理隊員になる —



お話 渡貫 淳子

(第57次南極地域観測隊調理隊員)

厳しい自然環境、食料や水、行動にも制限のある南極では、何事もおろそかにはできない緊張感がありながら、様々な発見や感動に巡り合うことができます。

著書では、母として家事、育児に奮闘する日々を送っていた渡貫さんが、南極観測隊の調理隊員にチャレンジし、1年4カ月を過ごした南極での挑戦を描いています。自ら望んでやってきた南極で、それぞれの役割を全うする隊員達の様子は、とても生き生きといて魅力的です。

今回は、南極観測隊員となるまでや南極での日々など南極を通して感じたことをお話いただきます。

〈渡貫さんの本〉表題作 (平凡社)

とき 11月15日(日) 朝10時〜12時

ところ 公民館 地下ホール

定員 40名(申込先着順)

申込先 10月20日(火) 朝9時〜

公民館 ☎(572)5141



*新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止とされていた講座です。

図書室のついで

『よよなら、俺たち』

ーダサくて、イタい。男らしさの先にある、私ー

お話 清田隆之(文筆業)



男性が「男性である」というだけで、「謝らない」「なにかとすぐ不機嫌になる」「やらなくて済む」といったような特権があるのではないのでしょうか。「男らしくあれ」と言われて苦しむ男性や、辟易している女性がいるなかで、そんな男らしさへの向き合い方について考えていきます。著書で、自らの失恋体験、恋バナ収集の現場で見聞きしたエピソードや、ニュース、カルチャーなどを通じて「自分と男性性」の問題について取り上げた清田さん。今回は、清田さんに男性というジェンダーについて見詰め直し、「俺たち」から「私」という個人への脱皮を目指すプロセスや、そこで感じたことをお話いただきます。

講座は、会場での対面形式での参加とWEB会議システムを活用したオンラインでの参加を併用します。

〈清田さんの本〉表題作(スタンドブックス)

とき 11月6日(金)夜7時〜9時

ところ 公民館 3階講座室

定員 会場受講15名(申込先着順)

オンライン受講30名(申込先着順)

申込先 10月9日(金)朝9時〜

11月4日(水) 夕5時

会場受講 公民館 ☎(572)5141

オンライン受講 下記参照

(※参加方法の詳細は11月5日(木)までに)

メールいたします。)

【オンラインによる講演の申込みと視聴について】

申込先 sec_kominkan@city.kunitachi.lg.jp

当日の参加者側の環境での接続や音声の不備についてのお問い合わせには対応はできませんのでご了承ください。

〈私の本棚から 第1回〉

磯部涼著 『ルポ川崎』

石井翔梧



音楽ライターの大磯部涼は、本書の中で、川崎を以下のような言葉で表している。「日本の近代を象徴する、そして、未来を予言するような場所」「日本を抱える問題を凝縮した都市」。

本書が焦点を当てるのは、川崎の中でも、最も南東に位置している川崎区である。川崎区は臨海部の工業地帯と、そこで働く労働者のためのいわゆる「飲む・打つ・買う」の業種を中心に発展してきた。おおひん地区と呼ばれる地域には、工場で働くために朝鮮半島から来た在日コリアンの人々がコミュニティをつくり、差別問題と現在も戦っている。1990年以降は、中国人、フィリピン人、インド人、ベトナム人や南米からの流入者も増え、様々な文化的背景を持つ人々が共生する地域になっている。

「貧困問題」「多文化共生」「ヒップホップカルチャー」と、読み手の問題意識や関心によって、様々な切り口から読むことが出来る本書だが、教育学部で学ぶ私は、川崎で生きる「子ども若者」の姿に強く引き込まれた。

多文化地域の中で、外国にルーツを持つ子どもや、現場仕事と安い家賃を求めて川崎にやってきた日本人を親に持つ子どもは少なくない。日本語の理解が十分でなく学校の勉強について

いけないこと、同年代との関係づくりの難しさ、経済的な困窮、不安定な家庭状況等、多感な時期に不安定な状況に置かれる中で荒れていく若者は多い。また、「地元」の強い連帯感(しがらみ)も彼らの生活を規定する。狭い人間関係の中で、授かり婚や離婚、再婚が繰り返され、親戚のコミュニティが広がっていく。狭く濃密なコミュニティの中では、ロールモデルも少なく、狭い価値観や人間関係に引きずり込まれ、抜け出せなくなるのである。そして貧困の連鎖が起こる。

一方で、様々なしんどさを抱えた若者たちによって生み出された文化もある。ラップやダンス、スケートボードといったヒップホップカルチャーである。川崎の若者が自分たちのアイデンティティを表現する手段になっている。印象的だったのが、川崎のこれらの文化が、川崎で生きてきたことに対してのアイデンティティや誇り、そして団結感を若者に与えているということだ。

様々なしんどさや多様な背景を抱えながらも、しなやかに生きていく子ども若者の姿は、私が持っていた紋切り型な川崎のイメージを広げ深めてくれた。それはニュースやSNSの情報では、到底知ることの出来ない複雑や豊かさも含んでいると思う。(サインズ)

係から

「私の本棚から」は今月から大久保芽衣さんから石井翔梧さんに引き継がれました。来月以降もお楽しみください。